

小規模農家の生産の原点と変遷について

昭和40年代、今から50年以上前私が生まれて育った集落は、東に日向灘、西に小高い丘陵、南は水田が広がり、北は尾鈴山を望む宮崎市北部に位置する。戸数30戸、そのほとんどが農家、金取りと呼ばれていた非農家が数戸、伐採した材木を馬で運び出す馬引き家業が一戸あった。集落の主要な道路は砂利道でようやく舗装が始まり、雨が降ると水溜りがあちこちにでき、晴れが続くと車を通るたび土埃が舞った。

我が家をはじめ、当時の集落の農家は、稲作、葉タバコ、甘しょ、黒皮かぼちゃ、繁殖和牛、構造改善事業で導入した温州みかんが主で、農閑期には日雇いの土木作業などにも出ていた。

我が家には、隣との境にチャの樹が植えてあって、春先に新芽が伸びてくると、親戚、子供を含めて家族総出で茶摘みをし、自家製のお茶づくりをしていた。お茶づくりといっても、全ての行程は手作業だった。鉄製の一抱えある底の浅いお椀型の大釜の中に摘み取った茶葉を入れて、焦がさないよう薪の火を調整しながら、団扇と手で茶葉を揉みほぐしながら、混ぜたり釜から上に放り投げたりを繰り返して、上手に水分を飛ばすやり方だった。やや渋めの炒った茶の香りがする、黄金の水色の釜炒り茶以外飲む機会がなかった。この釜炒り用の大釜は、冬場の味噌づくりのため大豆を煮るのにも用いられた。

田圃^{たんぼ}一面れんげの花が咲く頃、河川から水をくみ上げる共同ポンプ場が稼働して、荒起こしした田圃に順番に水を入れ、耕運機のロータリーで代かきが始まった。ビニールハウスで仕立てておいた苗箱を田圃に運び、田面が落ち着いたところから田植え機で苗を植えていった。田植え機は昭和40年前半一気に普及し、親戚総出の賑やかな手植えの時代は過去のものになった。

集落の農地は、昭和40年代耕地整理が始まり、河川改修が同時に進行して整理が終わった田圃を新しい川が横切った。蛇行していた川の流は直線に、川の両側の雑木林は消滅し風景も一変したが、数年に一度は氾濫した大水は無くなった。

昭和45年(小学3年)時、稲の作付け制限の減反が始まるのが、昼のテレビ

ニュースで流れた。我が家に限らず大事件だった。その数年後、温州みかんの価格が暴落し出荷したみかん代金の一部のみかんジュースが届くようになった。どうやら我が家の家向きは厳しいらしいと漠然と不安な未来を想像した。

半世紀が経過した実家のある集落は、農家数が1/4に減ったが、生産の原点、農地の基盤は変わらない。水田は主食米と畜産農家に委託する飼料用稲が増えて、収穫作業はコンバイン、ロールベアが普及して大幅に省力化が進んでいる。また、収量や品質が上がらない作物や労力の競合を避けてキュウリとマンゴーが主要作物となっている。栽培施設は環境制御が高度化し規模が拡大して投資額も桁違いとなって、大型化した機械施設の費用や人件費、燃油、生産資材など生産コストは上昇している一方で、販売する農産品の価格は十分に連動していない。コストの価格転嫁やバランスの取れた価格形成は今も大きな課題となっている。

現在勤務している茶業団体は組織ができて140年、茶の輸出振興をするため政府が設立した組織が母体となっている。お茶の輸出は幕末の横浜開港とともに本格化し、生糸とともに明治期の産業発展を支えたことが知られている。主たる輸出先の北米では、コーヒーや紅茶の消費に徐々に置き換わり、2度の世界大戦による輸出の低迷期を経て、戦後は国内の高度経済成長とともに内需に置き換わった。お茶(緑茶)の生産と消費は1980年前後にピークを迎え、釜炒りなどの自給的な茶づくりも減っていった。その後、嗜好の多様化や簡便化が進み、リーフ茶の消費が縮小する一方ボトル茶飲料が伸びて、直近では飲料や加工食品向け抹茶・粉末茶の需要が国内外で急増し、令和7年の緑茶の輸出額は721億円、過去最高となったが、平成の茶価の低迷から旧来の茶産地、茶問屋、専門店の淘汰が進んでいる。

長い時間をかけて培われた農産品の生産の原点や本質・価値は変わらないが、人や物、サービスがどう変わっていくのか、時代が進んでも見通すことは簡単ではない。これから先も、どこにいても、何をしていても、変化していく経済社会への対応が続いていく。

(公益社団法人 日本茶業中央会 専務理事 鈴木貞美・すずき さだみ)